伊奈長三郎（いなちょうさぶろう）

土は水を得て形となり、火を通してやきものとなる

－常滑の近代窯業の開発と発展に尽力－

伊奈長三郎（1890 ～ 1980）
出典：伊奈長三郎追想録編集委員会編『伊奈長三郎』1983

■生い立ち－陶芸から陶業、そして工業化へ

伊奈長三郎は、愛知県知多郡常滑（とこなめ）村（現・常滑市）で第5代目窯元の伊奈初之丞（はつのじょう）の長男して生まれた。長三郎は、1912（明治45）年に東京高等工業学校（現東京工業大学）窯業科を卒業し、さらに近代的ビルディングの最新情報を学ぶため米国へも赴いた。

長三郎の生家伊奈家の祖として窯業関係の分野でその作品が知られる最も古い人物は、長三郎の五代前の初代長三郎（号：長三（ちょうざ）、1744～1822）である。彼は、それまで農家の副業として続けられていた甕（かめ）づくりから進めて、1766（明和3）年に茶器の製造を始める。二代から四代目までは急須や花入れ等の生活用陶器の製造を代々つづけていた。しかし父親である五代目、初之烝（1861～1926）が従来の小品とは別に、便器などへの関心と土管製造にのりだす。また初之烝は常滑だけでなく、東京での商いをも会得した。彼は伊奈家で初めて、工場を建設する。そして伊奈製陶という企業を生み、その起業のための資金を大倉和親から受けた。

帝国ホテルの「すだれ煉瓦」は沢田平吉の土管工場で焼かれた
出典：『巧と業の協奏　INAXと常滑焼のあゆみ』1986

■建築陶器の国産化－フランク・ロイド・ライトの要求に応えた技術

伊奈初之烝・長三郎親子は、窯元として身につけたやきものの技術を買われ、フランク・ロイド・ライトが設計した帝国ホテル旧本館の外装タイルを製作するためだけにつくられた、「帝国ホテル煉瓦製作所」の技術顧問に招かれた。1918（大正7）年、父初之烝が帝国ホテル煉瓦製作所の技術顧問に就任すると、長三郎は父が務める技術顧問の代理となった。

二人はその力量を発揮し、1918（大正7）年から1921（大正10年）年の間に250万個のスクラッチタイル（当時の呼称はすだれ煉瓦、写真参照）、150万個の穴抜け煉瓦、そして数万個の装飾タイルを生産した。帝国ホテル旧本館は無事完成し、ライトが残した名建築として知られる。伊奈長三郎・初之烝は、ライトが望んだ色あいや表情のままの魅力あるデザインを、建築部材として求められる高い品質で、限られた期間に大量生産することに成功した。

旧帝国ホテルに使われたスクラッチタイル（すだれ煉瓦）　個人蔵

博物館明治村に移築保存されているフランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルの玄関　　写真：水野信太郎撮影

伊奈家が歴史上の有名建築と本格的に関わり合うスタートであった。世界一のタイル会社INAXの淵源である。

■地元から世界一の企業へ

建築用窯業材料には建築物に使われる陶器、炻器（せっき）、磁器、ガラス、セメントなどが含まれる。具体的には屋根瓦、タイル、洗面器、浴槽、板ガラス他に用いられる。清潔で健康な現代建築には欠かすことが出来ない。

伊奈長三郎と伊奈製陶およびINAX、現在のLIXILグループをみつめると、その歴史から強く感じる事柄がある。それは一人の技術者にのみ光をあてて史実を見ても果たして当該人物の全容を映し出したことになるのか、という疑念である。人が生涯をかけて成し遂げた仕事の多くは、親や祖父母ないし、もっと前の先達が何代もかけて営んできた歩みに支えられているという背景を痛感するのだ。伊奈長三郎という技術者の場合にも、筆者は同じような思いを強く感じる。

（水野信太郎）